石井十次と東洋救世軍

室田保夫

はじめに
一　石井と救世軍との出会い、そして東洋救世軍
（一）キリスト教と慈善
（二）救世軍を知る
（三）東洋救世軍の創設
二　東洋救世軍の活動
（一）濃尾大震災の勃発
（二）石井と『最暗黒の英国とその出路』
（三）救世軍来日までの石井
三　救世軍の来日と石井
（一）救世軍の来日
（二）石井と救世軍岡山小隊
四　明治末期における東洋救世軍の活動と展開
（一）日露戦争後—東洋伝道会
（二）ブースの来岡をめぐって
（三）大阪での事業—友愛社の創設
結びにかえて

はじめに

石井の日誌を繙いてみると、その生涯において洋の東西を問わず多くの思想家との出会いがある。思いつくまま挙げても、西洋においてはジョン・パウンズ、ジョージ・ミュラー、ウイリアム・ブース、ルソー、ペスタロッチ、バーナードらであり、日本人では西郷隆盛、新島襄、徳富蘇峰、二宮尊徳らである。[1] なかでもジョージ・ミュラーやバーナードは岡山孤児院の経営や思想において、またルソーやペスタロッチは自然教育においてきわめて大きな影響を窺うことが出来るし、それと同等にあるいはそれ以上に救世軍の創始者、W・ブース（Willium Booth 1829～1912）、そして救世軍（Salvation Army）の影響は大きいと思われる。それは石井自身のキリスト教思想のみならず、実際の孤児院の運営を理解するにおいてもW・ブースや救世軍を抜きにしては考えられないと表現してもよいであろう。その影響は一八九一（明治二四）年二月から始まり、明治末期の大阪における友愛社の創設まで視野に入れると、彼の生涯においてかなり長い期間に相当する。一八九四年の彼の日誌からブースへの想いの一例をみてみよう。

ミューラルの如く信じルソーの如く教育しブースの如く行ふ之れ予が天職なりと確信す（94・7・7）
予が生命のパンたる書籍は（イ）聖書（ロ）ジョージミューレルの信仰之生涯（ハ）ブース氏最暗黒之英国（ニ）ルソーのエミール（ホ）徳富氏の国民之友（94・7・15）

これは救世軍がまだ日本への伝道を開始していない時のものであるにも関わらず、ブースや彼の主著『最暗黒の英国とその出路』への思い入れが窺えるものである。かかるブースや救世軍についての記事は彼の日誌にこの他にも多く

記されている。明治初期に思想形成した日本の思想家には、その精神の一端に西洋への憧憬や思考軸の基準が往々に見受けられる。例えば留岡幸助といった社会事業家は当初、ジョン・ハワードに憧れ、空知集治監教誨師時代にワインズの著『The State of Prisons and of Child-Saving Institutions in the Civilized World』をバイブルの如く読み、研究したことは周知のとおりである。[2] このように石井はブースや救世軍の影響を強く受けており、換言すれば石井の思想や事業にそれが反映されていると考えるのが自然であろう。[3] 日本の救世軍の指導者山室軍平は岡山孤児院草創期からの知己であるが、石井とブースの著『最暗黒の英国とその出路』について次のように回顧している。

> 石井君も此の書物によりて啓発せられた処が大分あつたものらしい。其の茶臼原の農業部の如きも、地所は其の前から手に入つて居つたであらうが、そこに農業部を設けて、事業をやらうなどいふことは、殊にブース大将の此の書によつて、ヒントを得た処が多かつたのである。又孤児院に楽隊を設けたなども、此の書に学んだことであつたと承知して居る。中にもブース大将が社会主義を論じ、個人主義を論じ、幾多の異なる主張を批評して後「我は実行の人である、今言ふて直ちに行はるゝ経綸を定めて、我と同じ時代に悩み苦んで居る同胞を救ひたいのである」といふた、其の「我は実行の人である」といふ一句の如き当時の石井君を感激せしめたことが、如何ばかりであつたか知れない。これは君が其の後、何度も自ら語り出でられた処に徴して之を知ることが出来るのである。[4]

思想史の課題としてもある西洋への「模写」は社会福祉（思想）史研究の重要なキーワードとして位置している。そして「模写」は一方で「正統」と「異端」、そして「外来」と「土着」との相克の問題でもある。

ところで救世軍とは一八六五年、ウイリアム・ブースによって英国ロンドンで「東ロンドン伝道会」として出発し、七八年に「救世軍」と改称されたキリスト教の一派である。救世軍が来日するのは日清戦後、一八九五（明治二八）年九月のことである。しかしそれ以前にブースやその活動は一部の人にのみ知られていた。その中でも石井の救世軍との関係は、救世軍への理解とともに、彼が実際に来日より四年早く、「東洋救世軍」という組織を創設し活動して

いた点において特筆すべきものと言えよう。観点を考えると日本の救世軍史上からの石井の位置づけも必要であるということである。[5] もちろんここでは石井十次研究の一環としてあり、問題は石井の中での救世軍やブースの影響についての課題を追求することにある。

本稿の目的は、石井の日誌を中心にして、山室の回顧にあるように石井のブースや救世軍との出会い、そして東洋救世軍を組織し自己の血肉と化し、実際の孤児院の運営においてどう具体的に展開していったか、そして石井への思想的影響を膨大な『石井十次日誌』を中心にしてみていくことにある。

一　石井と救世軍との出会い、そして東洋救世軍

（一）キリスト教と慈善

石井十次が救世軍という存在を初めて知ったのはおそらく日誌に初めて登場する一八九一年二月のことであろう。ブースや救世軍について体系的に詳しく学んだわけでもなく、偶然目にした雑誌記事で知ることになる石井には、それに惹かれていくだけの素地ー受け皿がなければならない。石井と救世軍との関係を叙述するに当たってさしあたって、彼とキリスト教の問題について論じていくことにしよう。

石井十次は一八六五年四月、宮崎県児湯郡上江村にて生まれた。内田義彦によれば「政治青年」（「明治青年」）の類型に入るジェネレーションの誕生である。[6] 彼がキリスト教に接する大きな契機は宮崎の医者・荻原百々平との出会いにある。これは一八八二年、一七歳のことであるが、この荻原との出会いは一方で石井をして医者になるべく、岡山への勉学へと向かわしめることとなった。この石井の岡山への遊学という決断の中に人生の大きな転機が訪れる。[7]

周知のように岡山は明治初期よりキリスト教伝道が活発に展開された地であった。医学校時代、石井はカトリック教会で洗礼を受けるまでに至っていたが、この頃プロテスタントの岡山教会に替わっている。石井は一八八四年七月、新島襄の「同志社大学設立趣意書」を読んで感銘をうけ、故郷に朝晩学校を開校した。[8] 当時岡山教会は同志社を卒業した熊本バンドの金森通倫が牧師として赴任していた。かくして石井は一八八五年一一月二日に金森から洗礼を受けたのである。[9] このキリスト者として生きるということ、そして金森から洗礼を受けたということ、ここに石井の人生の出発点があることをまず確認しておきたい。新島の思想にひかれ、当時組合教会系の岡山教会、熊本バンドの一人金森から洗礼を受けたことは石井のキリスト教の性格の一端を形成する。周知のように金森自身も後に自由神学に奔り、救世軍にも入隊する。当時金森の伝道は「〝聖霊に酔う〟体のリバイバル的説教」[10]と評され、岡山を拠点に中国地方、日本と「神の王国化」を目指していた。組合教会中でも瞠目すべき教勢の拡大を示していたのである。石井もこの金森の影響をうけ、比較的自由なキリスト教理解であり、そして基本的な対社会への視座は「社会に対する近代的感覚の高揚」であったと言えよう。[11]

次に石井の慈善事業への関心である。岡山医学校時代より慈善会を設け、実践的な活動を展開していた。その典型が孤児院事業でもある。しかし医者として、もしくは慈善家として生きることの苦渋から二者択一を迫られるが、その時、石井には両者をとることが出来ず、キリスト教慈善家として生きることになった。岡山教会との関係から言えば、金森の後任として岡山教会牧師に就任した安部磯雄との関係も看過できない。後年、安部とは思想、信仰において違いを見せるが、初期において石井は安部と親交を結んでいる。[12] 安部は石井より、そして石井は安部より影響を受けたのである。[13] 安部は後に『社会問題解釈法』を著し、その中で救世軍について肯定的な評価をしているのも、興味あることである。このようにキリスト教社会事業家として生きることこれは救世軍を受け入れる重要な素地であるこ

とは言うまでもない。

そして石井は慈善事業家として生きる中で満足出来ない何かを感じていたようである。その一つにはキリスト教社会事業家として生きる時、伝道者としての情熱ではなかったろうか。最初に私淑したのがパウンズであり、そしてジョージ・ミュラーであった。しかし「伝道」と「実践（実行）」の問題に対して疑問を払拭出来ないものがあったように思われる。そのような時、彼はブースや救世軍のことを知ることになる。彼こそ伝道と実践の課題について答えを与えてくれるような人物として映ったのでなかったか。ここで気をつけておかなければならないことは、この時、石井はブースや救世軍について、知悉していたわけではないことである。つまり一八九一年二月に偶然読んだ二つの論文で間接的に知ったことであり、したがって先ず我々はその記事に何が書いてあったかを知らなければならない。ブースや救世軍については植村らの論文や『国民之友』等のほか、その時代、多くの情報を得ることはなかったと思われる。次節でこれについてみていこう。

（二）救世軍を知る

さて石井日誌にはじめて救世軍のことが記されるのは一八九一（明治二四）年二月二〇日の段である。『聖書之友』三八号「救拯軍の女将軍ブース夫人伝」、そして「『六合雑誌』を読む」とあり、「将軍ブース氏の廃人利用策を読む」と記されてある。この植村の紹介記事より石井は救世軍を知ったようである。以下石井の日誌には救世軍やブースが頻繁に登場してくる。ブース夫人を論じた『聖書之友』の論文は渉猟が行き届かず未見なので、『六合雑誌』の論文をみてみよう。(14)

今より二十五年ほど以前にロンドンの東部、貧民及び不徳者の巣窟たる地方に於て熱心に伝道に従事する一の夫婦あり其の志ハ基督の所謂る我ハ失ひし者を尋ねて之を救はん為め来れりと云ふの趣旨を実行せんとするにあり其信ずる処は第一、独一真神の

存在即ち此世界ハ悪广〔魔〕の世界に非ず仁愛無上の神の世界なり故に廃人廃物遂に存すべからず第二、人を信ず人ハ神の子にして霊妙なる神の性を具ふるものなれバ仮令如何に堕落すると云へども遂に改悔して善人となるを得ざるの理なし此二の信仰に基ひて伝道に従事したるブース氏夫妻ハ伝道の方法として左の三の趣旨を実行せり第一キリストを説ひて聴衆の即座の悔改を促す事第二、前日の廃人を利用して伝道の補助を為さしむる事第三、軍隊組織の法によつて伝道隊を組織し伝道の運道を整頓し且つ自由にする事而して外面より一見して以て著しと為すべきハ此伝道隊が楽隊を卒ひブラグを押立て号令の指図に従つて市中を徘徊し熱心に路傍伝道を為すに在り…以下略…

このような文章で始まり、以下ブース夫妻の人となり、救世軍の現状や活動内容等について詳しく報じている。雑誌論文としては比較的長文に属するものといえようし、コンパクトに救世軍を理解するには適宜な内容である。末尾は以下のようである。

余輩ハ此ブース氏の大計画を聞ひて大に心に喜ぶものなり救世軍の組織ハ直ちに之を日本に適用し得べきものなるや否や或ハブース氏の救済法ハ我国民の事情に応用すべきものなるや否やハ自ら別問題なり然れども余輩ハブース氏の著を読み其言ふ所を聞ひて世界の罪悪貧困苦痛等ハ之を救ふの法未だ明かならざるが故に存するものにして若し適当なる方法を発明するを得バ此世界ハ遂に楽園と為る事を得べきを感ずるなり余輩ハブース氏の廃人利用主義に感服す蓋し悪に強きものは善にも亦強し悪を為すに巧みなるものハ善を為すにも亦巧みなり悪人を利用して世の良民となす時にハ其利益実に意外なるものあらんとす又貧民者を恵むといふ事ハ基督教の第一義にして基督自ら其行に於て其教に於て明かに此事を示し給へりブース氏の生涯の働きハ世界の貧民の為めに為せるものにして大に基督の心をあらハすものなりといふべし又吾人ハブース氏の計画を読んで社会問題の解釈の方針を知る蓋し社会党共産党の輩ハ云ふ曰く家庭の制を廃すべしと余輩ハ思ふ富める者貴とき者賢き者力ある者をして貧愚の民を愛せしむべし貧愚の民も亦富貴の人を愛せしむべし互に相愛し相助くるの精神社会に充ちて始めて此社会の完全を見るべきなり又余輩ハ西洋諸国に於て基督教の生気活発なるを見る社会問題を論ずる事ハ不信者も亦之を能す然れども身自ら貧民の友となり共に惨苦を嘗めて之を助け一万人以上の同主義者を指揮して貧民の救助に従事するが如きハ独り基督を信じ基督に導かるゝ所の人のみ之を能すブース氏の生涯及び其事業ハ基督教の大なる証拠論なりといふべし

二月二〇日、石井は『六合雑誌』の植村のこの論文によって、はじめてブースや救世軍を知ったわけで、この日より

ブースや救世軍が石井の中に入ってくることになる。石井の日誌による当日の感想は次のようである。

あゝ主と共もに働くものゝ其の結果はいかに大なるかな主約して宣はく「誠とに実とに爾曹に告げん我れを信するものは我が行すところの事をなさん且つこれより大なる事をなすべし蓋はわれわが父に往けばなり」と予一層の勇気と希望を抱けり

〔感謝〕あなたは鳥度この私が決心の場合に応してこのブース氏があなたと共もになしつゝある其の事につきて読ましめ玉ふたることを感謝すあゝ主よ天軍を従えつつ相応援し勇気を与えて戦はしめ玉ふことを感謝す

一方、筆者未見の論文、「ブース夫人伝」については「あゝ予は此の伝記を読み全身振ひつゝ喜びと勇気とに充てり——あゝ予は救拯軍の一兵卒なればなりアーメン、アーメン」と、石井独特のインスピレーションを受けたのである。救世軍は伝道と社会事業を併せ持っていく団体であり、「医書焼却」という決断の上、孤児院経営という天職を見いだしたとはいえ、石井にとってキリスト教の伝道という問題は大きな課題として心底に残っていた。次に伝道の問題を考えていくことにしよう。

石井は以前より「什一伝道会」や「岡山有志伝道会」等の伝道団体を構想したが、満足に機能しなかった。そしてこの論文を読む前、「播種会」という毎週一回未信者への伝道の会を孤児院内に設けている。この構想は岡山教会の有志者にも計られたが、二月一八日には安部磯雄に会い播種会議案廃止の旨を告げており、教会とは別に孤児院内に播種会は創設されたようである。同日、「決して教会に関係する勿れ独立独行たゞ天父にのみ倚頼して命せられたることをなせ」と独立伝道の意を表明し、一九日には次のように記している。

主は其の生涯を、其の生命を、犠牲として天父を愛し吾人々類を愛するの熱心によりして吾人に天父を顕し其の無限の御慈悲を示し吾人の罪のために十字架に血を流し玉へり吾人主の血に由りて天父を認め其の愛を識りこの幸福を受け乍ら豈に猶々懶怠黙々としてこの日を費やして可ならんや

あゝ予は往かん京橋の上に行かん京橋の上に行ひて霊と共もに伝道せん往来の人々に小冊子及び説教を頒布せん

そして「我若し心狂へるならば是れ神のためなりキリストの愛われらを勉ませり」と覚悟を認めているのである。このようにして石井は小雑誌を携え京橋上に立ち、伝道を行うこととなったのである。[15] かくして「あゝ伝道は愉快なるかな猶ほ恰も国家反賊の蜂起せるとき義勇兵起つて前後より相夾撃するが如し君人前より攻むれば天父は数多の天軍を指揮して後面より奮撃相応援して魔軍を撃破し玉ふ況んや主已てに世に勝ち玉ふに於てをや魔王は已てに擒となるに於てをや勝兵は先つ勝つて而して進むと主の兵卒たるもの豈に猛進奮撃せざる可けんやムーデー氏伝道成功の秘訣も亦た蓋し茲に在るべしアーメン」、「あゝ予は天軍と相応援して百の弾丸を放ちて戦へり――あゝ之れ予が戦争の第一なり」と「所感」と「覚悟」（二月一九日）を記している。そしてその翌日、二〇日に例の論文に接することになる。したがって孤児院を経営しながら、独立独歩の民衆伝道を志向するキリスト教社会事業家石井が救世軍の精神に共感を覚えたことはきわめて自然なことである。

この救世軍に関する論文との出会い以降、石井はブースや救世軍について記す所が多くなる。同年六月二五日の日誌には「あゝ今日は已てに神学説の時代にあらず現にキリストと共もに働くの時代なり盛んなれよ救世軍」、「ミューラ先生の信仰を以て――ブース氏の事業をなさん?」等である。

（三）東洋救世軍の創設

ここで石井の東洋救世軍の創設に入る前に日本に於ける救世軍の導入の歴史を見ておきたい。植村正久は渡英した時、救世軍について知る機会を得、前掲の論文を書いている。島貫兵太夫も一八九二年五月にブースに書簡を出している。[16] 島貫は救世軍来日前から東北十字軍を組織していたが、実際、活動をしていた点から言えば石井に一日の長があるといえる。[17] また同志社でいち早く救世軍を紹介したとされる長坂毅もいた。[18] さらに社会主義者の片山潜も一八九四年、渡英した時、救世軍を訪問、調査している。[19] かかる点から考えても石井の救世軍への関わりは、とりわけ実際

に東洋救世軍という団体を設けいち早く活動したことにおいて重要である。それは一八九一年七月二七日の「日本にも救世軍を組織して活動を創めんと欲へり」いう日誌の文章にも窺える。

一八九一年九月二五日の日誌には「将軍ブース氏にインドよりの帰途日本へも来遊あらんことを望むとの書面をバックストン氏より紹介して貰う様依頼せり」とあり、また一〇月二日の日誌記事に「ブース氏の渡来を祈る」とある。そして一〇月六日の「(思考) 東洋救世軍」という箇所には、「東洋救世軍」として、次のように構想されている。

東洋救世軍は
(一) キリストの新誡を以て精神とし
(二) モーセの十誡を以て律法とす

東洋救世軍は
(一) 六日間は働くべしとの律法に基き或ひは独立或ひは共働日本良国民の模範として其の律法の範囲内に於て忠実に生活的職業に従事し美はしきホームを作り子女を教育し公益を計り互ひに相愛して社会の改良進歩を補ひ
(二) 毎日曜日には一切の業を休み軍隊を組織し士官命令の下に於て一ら伝道に従事す

東洋救世軍は
(一) 器関新聞を発兌し本軍の主義並事業を明らかにす
(二) 生産的事業を起し軍隊並悔改者の生活的作業の便にす

東洋救世軍は
内外国有志者の寄付金物品等を受けて以て之れが運動費に供す

東洋救世軍は
有志者の求めに応して
(一)献身的の伝道者
(二)献身的事業家 ／を派遣し社会万般のキリスト教事業を助く

ここでの「東洋」の意味はあくまで「西洋」（救世軍）に対するものであったと推察され、日清戦後の「東洋」という概念と意味内容が違うのではないか。この創設に当たっても石井流の「東洋救世軍」の定義作りから始められることになる。

そして石井は同年秋より岡山県内、近郊において救世軍宛らの進撃を開始していくことになる。[20] 例えば一〇月二二日には高梁にて「東洋救世軍大演説会」を開催し、また一〇月二八日の日誌中「孤児院と救世軍」という箇所では次のように認められている。

蓋し岡山孤児院は将来活動させんとし玉ふ東洋救世軍の士官学校また種子にして初期十年間は即ち準備の時代ならん然り而して静かにまづ今日の理髪学館に於ては哨候兵を養成し卒業するや否直ちに之れを天下の各市邑に配布し救世軍のステーションを置き西播の農業学校に於ては彼等の精神と智識と身体とを鍛練しをき一旦主キリストよりして進撃の号令下るや否響応其の命令のまゝに社会を蹂躙し主の王国を禦かんあゝこれ主の御計画と信ず吾人豈に潜心注意以て此の準備の時代を経過せざる可けんや

「西播の農業学校」とは小橋勝之助の博愛社を指しているが、ここには博愛社との協力関係の下での構想が読み取れる。[21] そして実現はともあれ救世軍士官の養成について構想を練っていたことがわかる。

二　東洋救世軍の活動

（一）濃尾大震災の勃発

前章の如く「東洋救世軍」を構想し、期待を懐いていた時、濃尾大震災という日本近代史上においても関東大震災と比肩しえる大災害に遭遇することになる。しかし逆に社会に向って進撃することを公表した石井にとって格好の活

動の場が与えられたわけで、石井は東洋救世軍の名をもって名古屋に活動の場を移すことになるのである。一八九一年一一月一七日の日誌には次のように記されている。

東洋救世軍

あゝ此度の大攻撃は如何なる意味を含むや試みの御目的は何になるやとは予が此度コレラ病進撃に出遭ひし始めよりの問題なりしが豁然として左の思考浮べり

(一) 東洋救世軍誕生の時代来れり

(二) 予はジョンハワード氏が地震を利用して社会に出てたる如く

(三) 此の機に乗して東洋救世軍を起さん、左の如くして

(一) バックストン氏に面会していよ〳〵ブース将軍に渡来を請求すること

(二) 大坂に至り宮川牧師にあい同君を押して将軍とし

(三) 朝日新聞を利用して直ちに全天下に被害地孤児救助義捐金募集をなし

(四) 社会に東洋救世軍の何物たることを知らしめ

(五) 然後に活動を着々歩として起さん

……以下略……

そして末尾に「主若し許し玉はゝ予は此機に乗して蹶起せん」と覚悟を認めている。ジョンハワードに準えて、地震を利用して東洋救世軍を本格的に旗揚げして行く覚悟が記されている。[22] そして石井は同年末には震災孤児院の設立趣意書や孤児院概則等を発表し、名古屋に向けて進軍していくことになるのである。

社会は恰も水の如し下層より熱するにあらざれば変して之れを熱湯に化する事能はず主キリストが大改革者たるの眼識実に驚くべし社会の改革を以て自ら任じるもの深く鑑みざる可けんや(『石井日誌』92・1・7)

これは一八九二(明治二五)年一月の「所感」であるが、これはまさに救世軍の精神と共通する考えが見受けられる。石井が下層社会からの根本的な改革を志向していたことに注目しておく必要がある。

さらに九二年に入ると石井は「孤児救済軍」という救援組織を創設している。この孤児救済軍についての記事は二月二一日の日誌に以下のように記されている。ここにも救世軍の影響を推察できよう。

第一、目的及び方法
本軍は天下無告無頼の孤児を救済し之れを養育して天賦の幸福を完ふせしむるの目的を以て外は徧く彷徨せる孤児を捜索して孤児院に入院せしめ内は院内に於て孤児と共に寝食を同ふし彼等の保護養育に従事す万事軍隊組織を以て運動するが故に団隊を名けて孤児救済軍と称す

第二、軍隊員
基督信者にして一身を孤児のために犠牲とし生涯を送らんと決心せしものに限る但し六ヶ月間の試験を要す

第三、隊員の義務
万事指令官の命令に従ふべきものとす但し其義務を尽さゞるものは除隊す

第四、軍隊の費用
凡て其の実費を支給す但し自弁せんとするものは勝手なり

第五、軍隊の組織
左の組織よりなる、而して皆な軍隊の選挙よりなる
十長　五十長　百長　千長

このように救世軍様式でもって孤児救済の組織を計っていることが看取できるのである。石井は救世軍の活動を濃尾大震災の救済活動に乗じて展開していく構想をもったのである。それは東洋救世軍を江湖に知らしめるべく絶好の機会でもあった。

（二）石井と『最暗黒の英国とその出路』

石井がブースの主著『最暗黒の英国とその出路』を手に入れたのは九二年一月二日のことである。日誌には「青木君よりブース氏最暗の英国なる書与えらる」とある。青木とは青木要吉のことで米国に滞在しており、当時救世軍の

著名な本を送付したものであるが、この件において石井の要求があったかどうかは判然としない。

多忙な石井にとって不幸中の幸いなことは、その年の四月末から約一ヶ月間、痔の手術のため同志社病院に入院し、比較的、自由な自分の時間を持てたことである。ここで石井は同志社学生の山本徳尚よりその訳を聞くことになるのである。[23] 五月四日には「ブース氏最暗の英国を同志社山本君より読んでもらえり」とあり、五月二八日、石井は日誌に次のように認めている。

読経祈禱（一）主よあなたは昨日ブース氏の書を読ましめ玉ひ僕は実行の人、貧富の中間に立つて而かして平和的に貧民社会の進歩改革をなさしめ玉ふものなることを明悟せしめ玉ひしを感謝す（二）何卒いまあなたが托し玉へる事業を忠実に働き、わが国の孤児貧児を救済し之れを実業的に教育し、理想的天国に於て成長せしめ恒に霊を注ぎ玉ふて基督の心を以て心とし終ひにはまた其の同胞のために一身を犠牲にして御用を完ふしうる人物を出し玉ひ聖国が此国に来り聖旨の天に成る如く此世に成る様に御導き玉はんことを切求す　主の聖名に由つてアーメン…略…（六）ブース氏救貧策をきく（所感）（一）社会の廃民を救助するは猶ほ恰も化学者が廃物を以て種々の色素或ひは有益物を製造するが如し即ち之れが各分子を一の結晶体として組織するにあり之れを一の組織体として運動する時は易々として成就すべきなり（二）予が救貧策は之れを三つに分つ（イ）市中植民（ロ）田舎植民（ハ）海外植民（三）埒原子曰く廃人利用貧民社会の救助策たる其の精神に至つては即ち一なり然れども文明の度異なる所ろの英国と我邦とは自ら其の方法に異なるところなかるべからず予が曰今の救貧策は（第一）孤児院を設立して之れを先導者となすこと（第二）孤児の成長児を以て工業を起し之れに商業を付帯し商工業を以て武器とし内は内国より外は大明に及ぼすべきことこの二ヶ条を以てせんと希望せり。

ここで注目すべきは「貧民社会の進歩改革」や「植民」といった救世軍精神の理解であり、「文明の度異なる所ろの英国と我邦とは自ら其の方法に異なるところなかるべからず」という認識を持ち、孤児院事業を中心に据え、「商工業」を武器として打ち出していることである。ただ当時の石井に植村同様、「社会の廃民」とか「廃人」といった認識があったことは否定できない。

周知のように同志社の学生であり、後の日本救世軍指導者山室軍平は当時、石井の事業を手伝っている。そして救世軍やブースについては、むしろ石井より教授された事実があった。そしてこのブースの著もこの病室で聞くことになる。山室は当時を以下のように述懐している。[24]

明治二十五年の春、石井十次君は痔の手術を受くめ為に、上京して同志社病院に入院せられた。此は当時有名なるドクトル・ベリーを院長として、経営せられたる病院であつた。其の少し前に石井君の友人某氏が米国から救世軍の創立者、大将ウイリアム・ブース著「最暗黒の英国及びその出路」といふ一書を贈り、「此は目下欧米諸国で大層評判の高い書物であるから、一部贈呈する」というて来た。そこで君は其の書物を携えて入院し、同志社の学生にて英語に堪能なる山本徳尚君といふ人に頼んで、毎日之を其の枕許で訳読してもらい、私は又毎日出かけて行つて、石井君の為に、其の聞書を作ることゝなつた。石井君が此の書物によつて、孤児院の事業を経営する上に、多くのヒントを得たのは申す迄もないことであるが、其の副産物として、私が得た利益も亦、決して之に譲るものではなかつた。…以下略…

ブースを知ることによって石井個人の伝道精神の炎が再燃したと言ってもよいであろう。救世軍の事業やブースの思想は石井の中に自己変革をも迫るインパクトを与えていった。そして山室が救世軍に入隊するのもこれが伏線となっていることは言うまでもない。

石井は一八九二年秋より再び伝道活動への決意がみられる。石井には従来、伝道活動については岡山有志伝道会、播種会等のほか具体的な活動は単発的で、持続性を持たなかった。救世軍を識ることによって、石井の中にそれが位置づけられたのではなかろうか。九二年九月二五日の石井の炭谷小梅宛書簡には「いまや小弟は前に反し、愛姉の喜び玉はんことを報ぜんとす。即ち小弟信仰の復活したること之れなり。小弟一昨日ステーションを出でて独り汽車中に黙想する、俄かに主命なるべし。心中に勃々としてをさゆるべからざる思想起り、信仰の焔々としてもえあがるを見たり…略…小弟受洗直後の伝道を望めんこと茲に九年、幾度か戦はんとして退きたりし。されど今や進んで戦ふの

時来れりと信じ、敢て自らの不肖を顧みず出陣せり……後略……」（『石井日誌』92・9・26）と信仰復活の覚悟が認められている。そして同年一〇月より伝道活動が活発に展開されていくことになる。[25] 以下、九二年の石井率いる東洋救世軍の活動である。

一〇月二七日　救世軍決死隊十名午後二時過ぎ備後へ出発。余は主が救世軍と共もに出陣することを許し玉はず。今日この時に院内に居らしめ玉ひしことを感謝に堪えず。ペテーより救世軍と余との旅費として四円二〇銭。

一〇月二八日　救世軍は遠征の途にあり。一時二〇分尾道に着。野外説教（二回）。会堂にて説教会に列す。

一〇月二九日　軍隊は市内に弾丸を配布、女子三人は田舎に向って進撃、余は中国福音同盟会に列す。軍隊一同、当地裁判所長脇屋氏を訪問。東洋救世軍最初の野外説教。警察署に引致される。夜、会堂の説教会に列す。帰途丸山に立ち寄り、本多、片桐、光延の三人と感話。一一時半小野田と寄宿。一二時頃着眠。余は主が全智の御摂理を以て野外説教をなさしめ玉ひ充分なる満足を与へ玉ひ且つ一たび警察官の手を以て引致し玉ひしも無事に赦し玉ひしことを感銘に堪えずあゝ主は余が如きものをも尚ほ其の御事業の一部に使用し玉へることは実に感喜に堪えざるなりアーメン。本夕は満堂立錐の地なく堂外にも人山をなせり当地の人曰く蓋し救世軍昼間の働きの反響にして開堂以来始めての大集会なりと終りに軍隊の喇叭隊四名君が代を奏す実に活且つ粛一同勢を将て散す余は主が軍隊を使つて斯く其の事業を助け玉ひしを謝す。

一〇月三〇日　夜、軍隊の説教会で談ず。余は主がかく力を与えて御用に御使ひ玉へることを感謝に堪えざりし蓋し余が生来今日の如き満腔の勇気と喜悦とに満たされたるはなかりき而して坐に古昔の預言者使徒及びムーデー、フヒンーと云へる一流の人々のことを悟れり。

このように石井は九二年一〇月より、救世軍方式の野外説教を積極的に実施していくのである。救世軍を知り、旧来より抱懐していた伝道への意欲が再度わき上がったといえる。ここには「軍隊の喇叭隊」とあり救世軍様式が窺え、後の音楽隊の萌芽を想起させるものである。

（三）　救世軍来日までの石井

一八九三（明治二六）年八月三日の日誌は東洋救世軍について「今般本部を当市に移し左の方法と目的とを以て運

動に着手す　天下主イエスキリストに在るの兄弟姉妹熱心なる祈禱と応分の力とを以て本軍を授け玉はんことを望む」として次のような構想が記されている。ここには本部として名古屋の震災孤児院が挙がっている。

目的　我国始めとし東洋諸国に単純なるキリストの福音を宣伝し人々を罪より救ひ天父に帰せしむるにあり
事業　第一　一枚摺の説教を印刷し之れを配布す　第二　聖書を購入して之を求道者に頒つ　第三　一個人に福音を告ぐ　第四　所在地教会の伝道を助く　第五　臨時軍隊を組織し一枚摺の説教を配布し或ひは路傍に或ひは公会に於て説教す　第六　監獄に伝道す
経費　……略……
月報　毎月一回月報を発行し隊員及び賛成者に頒つ
……以下略……
明治二十六年八月
名古屋市白壁町七十五番地　東洋救世軍本部　世話人石井十次

一八九三年八月二〇日の日誌には「救世軍の雑誌―鬨声と名け伝道主義の雑誌を発行せん」、「直ちに東洋救世軍の概則を印刷せしむ」とあり、八月二九日には「救世軍の歌」なるものを創作している。一〇月九日には「本日より丹羽氏東洋救世軍主任として出席」とある。しかし名古屋の震災孤児院は一九〇三年末をもって閉鎖となり、必然的に東洋救世軍本部も岡山に置かれることとなる。また前述の「喇叭隊」はこの年、オルガンを購入し、「風琴音楽隊」として発足している。同年八月、石井は念願の機関誌『岡山孤児院月報』を発兌することになる。しかしこれも不定期の刊行となり、八号で終結し、一八九六年七月、月刊の『岡山孤児院新報』を再度、発刊することとなった。[26] ちなみに一八九五年に入ると北海道への植民の構想が出てくる。一月一六日には「東進して北海道に入り該道を徧歴して一の植民地を発見し〔東洋救世軍北海道農業部〕を設け青年をして春夏秋期に労働せしめ冬期にしてしつかり学問せしめん」と記している。かかる東洋救世軍を構想し、実践していく中で日清戦争が終結し、いよいよ英国から救世軍

が来日することとなるのである。

三　救世軍の来日と石井

（一）救世軍の来日

ライト大佐以下救世軍（Salvation Army）の一行は一八九五（明治二八）年九月五日、横浜に着した。[27] それは植村正久や石井十次、島貫兵太夫らの悲願がかなったものである。来日の大きな要因となったのは、やはり日清戦争への勝利であり、遙か大陸を隔てた島国の世界史への登場が救世軍の母国・英国からの派遣へと繋がったものであろう。ともあれ、救世軍は日清戦後の日本社会の中に入ってくることになる。来日直後の救世軍に対する記事は石井日誌にない。この頃、岡山孤児院はコレラが伝染し、九月一二日には妻・品子が昇天し翌一三日、葬式が執行されている。また岡山教会牧師安部磯雄との信仰での齟齬が生じたのもこの頃である。[28] この救世軍の来日は石井に如何なるインパクトを与えていくことになるのだろうか。当初石井は救世軍への入隊を窺わせる感想を記している。例えば九月二八日には「往ひて救世軍に投し其の旗下に於て奮戦せん」と記し、一〇月一日には「身を救世軍に投し而して全心全力を福音宣伝と孤児院事業に抛たんと考え」、一〇月二日にはブース大将宛に書簡を書いている（後述）。

しかし一方で救世軍の来日は、石井本来の東洋救世軍のアイデンティティーを確認することでもあった。一八九五年一〇月二五日には「実業的救世軍（一）西洋の救世軍は寄付金的救世軍なり（二）乍併東洋救世軍は願くは実業的救世軍たらしめよ」と記し、一一月一三日には「東洋救世軍なる吾党の団体はまた新機軸を以て新運動を始めさる可らず」、二二日には「『東洋救世軍』なる組織を編成して強固なる団体となし一の軍律の下に統一的運動をなす可し」、

そして「東洋救世軍　本軍は『キリスチャン』の団体にして主『イエスキリスト』の命令に従ひ其の経綸を此世に実行せんと欲するものの団体なり　目的一、孤児の救済二、貧民伝道三、貧書生の教育四、無職業者の授職五、出獄者の保護六、盲唖者の教育七、貧民の施療」とし、組織は士官と隊員からなると再構想している。

次に石井の友人であり、後の日本救世軍の指導者山室軍平についてみておこう。[29] 従来より山室が救世軍に入隊したのは石井の勧めからであったとされている。同年一〇月二九日には山室よりの書面で「救世軍共もに語るに足らざるなり」とあり、一二月四日には「兄弟山室兄を救世軍隊に編入なし玉ふことを感謝す」、また一二月一二日には山室軍平の手紙で救世軍ライトに会いにいくことを考えている。そして石井は神戸まで赴き、ライト大佐や山室と会い、小野田の通訳にて岡山小隊の件等について話している。[30]

さて石井は翌年、東上し、念願の救世軍を訪問することになる。一八九六（明治二九）年六月五日、石井は東上し新富町の救世軍仮本営に投宿し、夜、救世軍の集会に列している。その夜、石井は山室と夜半まで話しあった。八日には島貫兵太夫に会いその時の日誌に「東北救世軍は文を以て西洋救世軍は武を以て東洋救世軍は労働を以て茲に一心一体となり主なる葡萄樹に連り下等社会の救済に着手しては奈何と相談す」とある。九日には「救世軍は十九世紀基督教界を導くの機関車たらさる可らす」と記し、ライトに面談し、「あゝわかつた　悟りが開けた」と認めている。また一〇日には「救世軍の野外運動に従ひゆき始めて拍手誦歌せり　山室君傍より笑へり」とある。一五日には救世軍士官会に列席し夜の入隊式で勧話もしている。その後ライトにも再度合い、一七日帰途についたのである。この時救世軍機関誌『関声』は「石井十次君の来訪」と題して次のように報じている。少々誤報もあるが、筆者は山室であろう。

基督の前に約翰と云ふ人が現はれ路惕の前にはホスと云ふ人物が準備をしたと同く日本に救世軍が参た前に既に救世軍の精神を会得して其主義を学び心窃に西洋の救世軍が渡来する日を待望んで居た幾人かの聖徒が有つた石井十次君は其重なる一人であり

ました。明治二十四年二月の下旬に始めてブース夫人の伝を読み嗚呼余は救世軍の一兵卒なりと叫んだ者は此石井君であつた今より五六年前既に早く救世軍ブース氏に手紙を寄せて何卒日本にも救世軍を送り給へと請求した者は此石井君であつた起ては救世軍の制度主義に倣ひて数百人の児童を教へ導き寝ては夢の中に迄もブース将軍と相見るに至りたる者は実に此石井十次君であつた啻に之のみならず二十四年の暮美濃尾張に大震災の有るに際し数千円の金を集め八十人の孤児をば飢寒の中より救ひ親になり代つて之を養育した者は此石井十次君に由て起された東洋救世軍の運動であつた石井十次君は未だ三十一二才の壮年なれど其来歴は転た人をして感涙にむせばしむるものがある…以下略…（『興声』一六、96・6・20）

同年七月二〇日の日誌中「偶感」には次のような構想が掲げられている。前年九月の救世軍来日、及び六月の東上の衝撃が大きかったのか、石井は当時、かなり救世軍への思い入れは大きいものである。岡山孤児院と東洋救世軍、そして救世軍の三者の関係が出てくる。

一、凡そ事業は孤児院の名を以てするよりも
二、救世軍の名を以てする方可なり
三、即ち　（一）救世軍銀行（二）救世軍商業部（三）救世軍工業部（四）救世軍農業部（五）救世軍印刷部（六）救世軍伝道部（七）救世軍教育部（八）救世軍政治部
四、余は断然決心して救世軍に入信し其の一兵卒とならむ
五、其の一兵卒となつて然してわが東洋に理想的の救世軍を扶植せん
六、之れ天父が余に授け玉ひし大任と信ずアーメン

そして「東洋救世軍本営、岡山救世軍本営、大坂救世軍、日向救世軍、東京救世軍、朝鮮救世軍、日本救世軍岡山支部」と記載されている。この頃は東洋救世軍と救世軍との親和的関係が窺え、石井の入軍への意志が窺える。

（二）　石井と救世軍岡山小隊

ここで石井と救世軍岡山小隊との関係について見ておきたい。[31] 石井は救世軍来日の年、一二月に救世軍入隊を申し込み、翌一八九六年六月、石井は東上し、救世軍本部においてライト大佐に面会し、岡山に小隊設置を約したのであ

る。同年七月一八日の日誌には「予は明治二十四年来常に救世軍を欽慕せしが主六年目にしていよ々わが岡山に其の軍営を開き玉ふ様になり切に此のことを感悟す」と喜びが認められている。石井は同年七月、岡山小隊の設置に協力、救世軍の集会にも積極的に参戦しており、この頃石井は救世軍の活動に積極的に参加し過剰な迄に救世軍に期待している。例えば七月二九日の日誌には「一、日蓮が天力によってわが社会を教化したる如く二、救世軍は予を透して同じ天力に由ってわが八十余州を風化すべし三、余は徹頭徹尾救世軍の一兵卒として遊撃隊として天下の軍営を助け死に至るまで不惜身命主義を以て戦はんアーメン」とある。また当時の『鬨声』には石井の消息につき「救世軍々営を岡山に開くが為め兼て斡旋の労を執りつゝありし石井十次君は我大佐を助け軍営建物及び新軍営開設の任命を受け彼の地に出発のエンサイン、クラーク通訳者の周旋など非常に尽力せられたり」（『鬨声』一九、96・8・1）とも報告されている。　このようにして当時石井は岡山小隊の開設に関して尽力し、そしてその活動を支え、参加していった。八月七日には「あゝ真に世を救ふものそれ救世軍なる哉　然り余は断然決心し残生涯を救世軍に投して戦死せん　蓋し真正なる社会革命根本的社会改良は徧く『キリスト』教を伝えて御国を此世に臨らすにあらずんば到底成就すること能はざるが故なり」と。同月一〇日には「断然決心して救世軍に入る」「救世軍の一兵士として救世軍の集会に列す」とあり、翌一一日の朝の集会で石井は「予は救世軍に入れり何故に入りしやと説き起し予が満腔の希望を告白せり」とある。その夜も救世軍兵士会に出席している。以後の日誌を繙くと八月は毎日のように救世軍の集会に列し、その活動をしている。以上のような記事からみて石井は一時期救世軍に入隊したのではないかと思われる。

そうした中、九月、ライト大佐が帰国することを知る。そして一〇月三日には「独想」として「『ブース』将軍若し余を（日本救世軍司令官長）とし全権を余に託せば余は主の御力によって必らず我が八十余州に救世軍旗を翻えし充分なる勝利を得て栄を神に帰すべし」と記し、翌日には「余はどこまでも貧民の良友として弱者の味方として救世

軍の一兵士として此世を終ることを喜ぶ」とあり、これは次の様な書簡となって表れることとなる（『石井日誌』96・10・22）。

……前・中略……

若し将軍にして小生を信じ「ライト」大佐に代えて日本司令官に任し玉はゝ小生はただ主と其の霊とに由つて我が四千万同胞を救世軍の旗下にひざまづかしむることの遠からざるを確信せり　将軍以ていかんと思召し玉ふや　小生十年前より孤児救済事業に従事せり　然るにいまや事業殆んど其の著につき小生をして救世軍に投するも妨けなからしむ将軍若し小生は日本司令官として遣はさる可きものなるを信じ小生に日本を托し玉はゝ小生は必らず主の大能の聖手に由つて此の大任を完ふすべきを信ず　小生のいかなるものなりやライト大佐夫妻よく知り玉へり

小生は「人は天より賜ふにあらざればうくること能はさるものなることを信ず」是故に将軍にして小生が適当の司令官にあらさることを認め玉はゝ小生は強ひて此の任を望むにあらず　日本四千万同胞のため小生の心衷黙せんと欲して黙すること能はざればなり　敢て無礼を顧みず茲に一書を呈せしなり　願くは将軍小生の愚を咎めず将軍の思召のあるところを以て答え玉はんことを　小生は将軍の御返答を以て主の命と信ずるなりアーメン

明治二十九年十月廿二日　　岡山孤児院　石井十次

救世軍ブース将軍閣下

この石井の請願するところは救世軍という組織を知るものからすれば荒唐無稽な発想であり、石井の「思いこみ」の激しさ、空想的なものが一人歩きする典型的なものである。ちなみにこの書簡のあとに石井は（評）として「一、此手紙を『ブース』将軍が接けられたらんにはいかなる考を起し玉ふならん　二、日本人はかねて高慢な人種ぢやときひて居つたがま――実に々狂愚なやつもあるものぢやな――」（『石井日誌』96・10・22）と記している。彼の日誌に依ればこの書簡は一二月に投函されている。[32] また石井は同年一二月三日の日誌「偶感」の中で次のように認めている。

一、久振に東洋救世軍隊を組織して遠征の途に上らん哉

二、至るところの市町村に於て音楽的集会を開らき孤児院のために義捐金品を募集し且つ主の福音を宣伝せん又た可ならずや

三、然り往くべし　往ひて万国の民に吾が福音を宣伝せよ　爾等が勇敢き軍隊を組織して遠征の途に上り右に福音を伝え左に孤児のために乞食的運動をなすことは予が最も喜ぶところのことなりと言ひ玉えり

四、あゝ起てよとの主の命令は下れり　吾党が隊伍を整え「ラッパ」を吹きて日本八十余州を征服するの時は来れり　誰れか「エホバ」の時を拒みうるものあらんや　誰れか全能の主に敵するものあらんや　進むべし戦はずんばある可らざるなり

ここには音楽隊でもって日本各地に遠征していくこと、そして救世軍の軍隊形式でもって行なわれていくことが示されている。山室の言うように、明治三〇年代の音楽隊の活動が救世軍様式からのヒントであったように考えられるのである。

四　明治末期における東洋救世軍の活動と展開

（一）日露戦争後―東洋伝道会

前章でみたように石井は救世軍来日以来、ライト大佐に会い、自分も入隊の意志を表明し、また岡山小隊の設置とその活動に協力するなど、救世軍とは協力関係にあった。しかし、東洋救世軍は完全に救世軍とは合体出来ず、一方で東洋救世軍の方向性をもさぐっていたのである。

一八九八（明治三一）年五月四日の段に「読ときのこえ」として「一、救世軍の運動は吾党の刺激剤なり予はときのこえを読む毎に大ひに勇気を鼓舞せらる　二、ブース将軍曰く、攻撃の態度を取つて戦へ受太刀の結果は敗北である　三、吾党が進撃的態度を取りしは実に救世軍の賜なり」と、同月二四日には「一、十九世紀の社会に救世軍の伝道法が成功する如く、二、慈善事業も亦た救世的法が適当なり　三、十九世紀はもはや個人的戦争の時代にあらず実に軍隊組織的運動の時代なり　四、時々音楽会を開いて慈善事業を助くることが上策ならば――次々に所かへ連続的

に音楽会をやつてあるくことは実に上策ならずや」と認めている。また翌年一一月三〇日に「救世軍の路傍伝道を応援し予は十字架の福音を叫べり」といった記述がみられるが、明治三〇年代前半は救世軍に関する記事は少なくなっている。むしろ音楽幻灯隊を設置して日本各地に資金集めを兼ね、伝道や岡山孤児院の活動の宣伝、ネットワーク作りに集中している。この音楽幻灯隊が山室の言うように救世軍からヒントを得た物であるとするなら、東洋救世軍の活動が今度は幻灯隊へ変化したものと解せないだろうか。もちろん音楽幻灯会の発足の根本には財政的な要素が在ったことは言うまでもないことであるが。[33]

さて一九〇一（明治三四）年という新しい世紀を迎え、キリスト教界は「二〇世紀大挙伝道」事業を着手することとなった。石井も岡山を舞台にしてこの事業に参加していく。[34] 同年七月二一日に「『東洋救世軍』を再興して東洋の救済に着手せよ」といった記事があるが、東洋救世軍を再興するという考え方は救世軍来日初期の期待と裏腹に、次第に救世軍に対する疑念も生じてきたことと相関関係がある。一九〇二（明治三五）年三月一九日の日誌には救世軍の音楽幻灯会を見て、「所感」として次のように記されている。

一、浅草の見せ物的なり　二、サタン彼の人々を使ふてかかる演劇をなせるにあらずや　三、救世軍はもはや旧き酒となれり　彼等は日本魂を救ふこと能はざる可し　四、これにつきても予は一層吾党の責任の重大なることを感ず

救世軍を「旧き酒」と断じ、もはや救世軍に期待出来ないなら、ここに石井自身の「東洋救世軍」ごときなるものを早急に再構築していかなければならないことになる。

石井の日誌において日露戦争が開始された時期より、東洋への伝道という姿勢が明確化する。例えば一九〇四（明治三七）年ころより東洋十字軍の名称が現われる。救世軍が有名となり、名称が紛らわしくなったためであろうか。同年三月二〇日の記事には「東洋救世軍を改めて『東洋十字軍』と命名せんと感じたり」とある。以下、東洋十字軍

についての記事である。

四月二二日　（東洋十字軍）を組織して進撃的伝道を開始し・海陸軍隊の流したる血を肥料として福音の種子を播き東洋に天国を建設する・之れあに吾党の天職にあらずや

同月二五日　一日も早く二十万円の基本金を与へ理想的の教育を施し之れを清韓の地に移植し且つ東洋救世軍を組織して福音を宣伝し東洋に天国を建設せしめ玉へ

五月八日　一、日本軍の勝利即ち天父に代って腐敗せる露国を懲戒せしめ玉ひしことを感謝し　二、戦後大組織を東洋十字軍の活動を始めさせ玉え

六月五日　東洋十字軍は岡山孤児院の芥子的に発展したるものならざる可らず

さらに石井は一九〇六年一一月四日の日誌に「東洋聖書伝道会社」を設立し東洋諸国に聖書伝道者を遣りて福音を宣伝せしめん哉」と記し、一六日には「東洋宗教伝道会」設立の構想を、そして一二月二〇日には「東洋伝道会概則」を翌〇七年一月発表することを決している。これには石田祐安が関係している。[35]

東洋伝道会概則

東洋伝道会

目的

日本人、朝鮮人、支那人、シャム人、インド人に福音を宣伝すること

事業

(一)　東洋に於ける在来の宗教と、其の伝道方の歴史的研究

(二)　東洋式のキリスト教、及び其の伝道の真法を研究発見すること

(三)　東洋式キリスト教伝道学校（修道院）を設立すること

(四)　日本現今に適切なる社会救済事業を起し、実際に社会問題を解釈すること

一〇月五日には東洋伝道会の第一回演説会を中山下教会堂で開く等して、伝道にも力を入れていることが窺える。

しかし石井の良き理解者でもあった大原孫三郎はこうした石井の行動について一九〇七年、「近来石井君が東洋伝道会などに二心を持つから。どふも孤児院の精神がにぶった様に思はる。石井君は直覚の人信仰の人にして伝道などの柄にあらず」(『石井日誌』07・12・9)と批判したのである。ともあれこの時期、石井は「東洋十字軍」「東洋伝道会」等を組織し、「東洋」という地域的広がりを鼓舞した伝道活動も展開した。もちろん従来の「西洋」に対する概念から脱皮し、具体的に東アジアをさし、明らかに日露戦後社会の国家政策と符号しているのである。

(二) ブースの来岡をめぐって

一九〇七(明治四〇)年四月、救世軍ブース大将は初来日する。ブースは二月二三日、イギリスを出帆し、ニューヨークを経てカナダに入り、そこで約一ヶ月間転戦し、シアトルから日本に向かった。そして四月一六日、横浜に上陸したのである。[36] 日英同盟という政治的背景においてブースはきわめて好意的に歓迎された。一八日には東京市(市長尾崎行雄、助役田川大吉郎)の歓迎会、翌日は首相西園寺公望を訪れ、翌二〇日には明治天皇に救世軍服のまま会っている。かくしてブースは東京を離れ各地を訪問し、演説を為した。そして大阪、京都、神戸を経て、五月一五日、岡山に着した。[37]

ところでこのブースの来岡を石井は三月の段階から準備していた。例えば三月一九日にはペテー宅にて歓迎相談会の相談、二〇日には「ブース将軍の来岡を期して県下の信徒大会を開らくこと」とある如くである。五月一五日にはブースを駅で歓迎し、中山下の教会で演説会があり、翌一六日、岡山孤児院を訪れ、午前九時、香川館の前で演説し、夜は高砂座にて演説会がもたれている。[38] この時、石井はいかなる感想を日誌に寄せているのだろうか。五月一五日の日誌には「一、とても日本人は『ブース』式には救はれぬ　二、もはや大将の使命は終れり　三、東洋救済の全権は我党の手に移れり　四、よーまーあんなことが真面目にやれることじゃ」ときわめてひややかな感想を記してい

る。また五月一六日の日誌には「一、『ミューラー』先生来りてその東洋に於ける使命を予に分つ、予の主に対する責任や重且大なりと謂ふ可し……以下略……」「ブースの渡来は救世軍のためにあらずして予のためなり、予に其権能を頒たんがためなり」と記しているのである。しかし翌一七日にはブースを早朝訪問し、写真帳を贈呈し、ブースからも写真を貰ったりもしている。一九日には「所感」として「『ブース』大将を通じて吹き込まれたる精神尚益々熾なり」と記している。ブースの精神からの影響とともに、それが石井の東洋伝道会への思念へと受け継がれていることへの矜持の吐露であろうか。

石井は東洋伝道会の言葉に象徴するように、ここでも「東洋」というキーワードにこだわっている。そして「ブースの渡来は救世軍のためにあらずして予のためなり、予に其権能を頒たんがためなり」と解したように、ブースの救世軍から飛翔した石井の「東洋救世軍」「東洋伝道会」という認識があり、独自な活動の意義を見いだしているように思われる。

(三) 大阪での事業—友愛社の創設

石井にとって大阪への事業重視は豊臣秀吉を引き合いに出し、日清戦争前後の段階から表明されている。例えば一八九七(明治三〇)年一〇月二一日の日誌には「『東洋救世軍本部』を大阪に設け吾党活動の根拠地となさん哉」という決意が見られ、翌二二日、「東洋救世軍を社会に発表し公然社会的の運動に着手せん哉」とし、次のような構想を立てている。

東洋救世軍

目的　社会に棄てられたるものの友となり之れを救ふを以て目的とす

組織　本軍は全く一身を社会のために犠牲にし飽まで世を救はんと覚悟せるものより組織す
経済　軍立各実業界の収入と天下有志者の義捐金品とを以て維持拡張す
報告　毎月一回器関新聞を発行し事業の現況及び会計決算等を報告す

岡山孤児院大阪支部　　活版部長―林崎　商業部長――谷口　回漕部長――岩村真琴

それがさらに具体性を帯びて大阪での事業が本格的に展開されるのは日露戦後の一九〇五年頃からであろう。同年九月二八日の日誌には「一、東洋救世軍本営を大阪に設置して茲に鎮座し　二、大阪市中に向って新基督教を伝へて市民を救済し」とあり、また同年一〇月二五日には本営を大阪に置くことが構想されている。一九〇七年七月三日には「孤児院はもーこれで一先づ卒業したような心地がする。大阪事務所を根拠地として東洋救世軍の運動を始めよふか」とある。そして石井は一九〇八年頃より大阪での事業にさらに力を入れている。そしてそれを「東洋救世軍」の事業として位置づけていることに注目しなければならない。

石井は五月一四日、「午前六時の大『インスピレーション』時は来れり『東洋救世軍』と定め、明治二十四年来の理想を実行せよ」、そして一五日には「不言実行主義……とにかく一年間大阪に定住して、訪問即ち伝道＝托鉢即伝道を実行せよ」と覚悟を認めている。以下同年の日誌からである。

五月二六日　来年一月より大阪に移り東洋救世軍の事業を始めさせ玉へと祈る
（東洋救世軍概則を印刷）
二七日　本年中に孤児院の財政を整理し明年一月大阪に移り東洋救世軍の事業に着手せしめ玉へ

かくして石井は一九〇九（明治四二）年六月、再度「東洋救世軍」という構想を次のように披瀝したのである。

東洋救世軍
名称　本軍は東洋救世軍と称す　但しブース氏の救世軍とは関係なし

位置　本軍は事務所即ち本営を大阪市北区出入橋東詰に置く
目的　本軍は四海同胞の主義に基き不幸なる同胞に同情を注ぎ其の幸福を増進するを以て目的とす
事業　一、孤児救済。二、貧児教育。三、不良少年の感化。四、労働者子女の昼間保育。五、労働者の保護（㊀口入。㊁木賃宿。㊂殖民（日向朝鮮北海道等）。六、貧病者及び癩病者の慰問。七、免囚の保護。八、新平民の教化。九、老人の養護。十、売笑婦の救済隊員
隊員　身命を献げて直接に本軍の事業に従事するものを隊員と称す。但し衣食費は自弁のこと
賛成員　本軍の目的事業に賛成し金品を寄付するものを賛成員と称す
軍費　賛成員の義捐金をして軍費にあつ
明治四十二年六月一日

ここで気がつくことは第一はブースとは違う団体であることの表明である。しかしこの東洋救世軍に対し、当時の石井十次の大原・林宛て書簡によれば「東洋救世軍に対しては四方より名称変更の忠告続々有之　終に去る九日午後には神戸より本当の救世軍の連隊長一人の日本人士官を伴ふて来訪名称冒犯でもないがとにかく更へてくれる様にとの申込有之且つ夕方引続き田村新吉兄、古木牧師夫妻来訪同じく名称変更の件につきて種々御親切に御話有之」と記されている。（『石井日誌』09・6・11）このように東洋救世軍という名称は日本救世軍から抗議が起こり、名称をここでは「東洋救児院」と改称せざるを得なくなった。

第二として彼の事業に社会事業の具体的な形態を察知することが出来るということである。換言すれば日露戦後の社会事業対象の多様化であり、具体的には大阪という地域「東洋のマンチェスター」とも称された当時世界有数の商都・大阪の日露戦後社会への関わりと考えてよかろう。大阪の事業を始めていく時、ここには日露戦後社会に集約された社会事業対象の特殊性を理解しておかなくてはならない。とりわけ底辺労働者に居住する都市スラムが形成され、民衆の生活問題が露呈していたのである。[39] 換言すれば、石井の社会問題、都市社会事業への取り組みと言えよう。し

かし東洋救世軍を再々構築したとは言え、「救世軍」がブース大将来日以来、日本全国で市民権を得た名前になっていた以上、改称を余儀なくされるに至った。それについては同月一四日の日誌に「東洋救世軍を友愛社と改めることにいたし候」とあり、「友愛社」と変更されるのである。ちなみにこれはヨハネ伝一五章一三節「人その友のために己れの生命をすつる之より大なる愛はなし」から取られている。

友愛社

名称　本社は之れを友愛社と称す

位置　本社は大阪市北区出入橋東詰に置く

目的　本社は四海同胞主義に基き不幸なる同胞に同情しその幸福を増進するを以て目的とす

事業㈠、孤児救済　天下無告の孤児は悉く救済して之れを已設の岡山孤児院、茶臼原孤児院に送りて教養す

㈡、保育所　必要の場所に保育所を設け昼間は労働者の子女を預りて之れを保育し夜間は不就学児童に普通教育或は裁縫みしん等を授く

㈢、同情館　必要の場所に同情館を設け一、職業紹介、二、安宿（十銭宿二十銭宿）、三、貧病者の慰問、往診、施薬、四、免囚の保護、五、田舎より職業を求めて都に出て方向に迷ふて居る人々の保護、六、売笑婦の救済……等出来る丈け不幸なる人々の世話をなす

㈣、殖民　本社に教養せし孤児、貧児或は救済せし人々を日向或は北海道或は韓国等に植民地を設け殖民せしめ社員監督の下に安住せしむ

組織㈠、社員　衣食費を自弁し献身的精神を以て直接に本社に事業に従事する人を社員と称す

㈡、社友　本社の目的事業を賛成し金品を寄付し或は事業の実行に便宜を与ふる人を社友と称す

㈢、経費　社友の寄付或は府県市町村或は各慈善団体よりの寄付を以て維持拡張の資にあつ

㈣、役員　社長一人副社長一人評議員若干人但し本社の役員はすべて無報酬とす

㈤、報告　本社は時々事業の状況会計の決算等をなし各新聞紙に於て報告す

このように大阪の事業は爾後「友愛社」という組織を拠点に活動が展開されていくことになった。そして既述した

ように、これの淵源は「東洋救世軍」にあったこと、すなわち救世軍のヒントからであることがわかる。もちろん実際の救世軍とは「違い」があるが、キリスト教の伝道と救済を目的としたその精神は石井自身にとって多くのヒントがあったことは言うまでもない。爾後、この友愛社は大阪南の愛染橋の地における事業を中心として行われ、夜学校、保育所、更生保護事業等、セツルメント事業として機能していくことになる。石井の構想は新しい時代の新事業として発展していくのである。周知のように友愛社は石井没後も大原孫三郎の尽力によって、石井記念愛染園、愛染橋病院や保育所、さらに大原社会問題研究所等が設立され、さらなる展開を遂げていくことになる。

結びにかえて

石井は一九〇五（明治三八）年三月二九日の日誌に「信仰と祈禱は……『ジョジミューラ』に学び。目的と事業は……『バーナード』に学び。主義と方法は……『ゼネラルブース』に学び　大和魂をもて此の三人の精神と事業と方法とを消化して活動するもの之れ即ち〇〇〇〇也」とある。一九〇七（明治四〇）年五月一五日の日誌には「一、とても日本人は『ブース』式には救はれぬ　二、もはや大将の使命は終れり三、東洋救済の全権は我党の手に移れり四、よーまーあんなことが真面目にやれることじゃ」とあり、また五月一六日にはつぎのように記している。「一、『ミューラー』先生来りて其の生命の衣を世に遺し　二、バーナード師？て其の精神を世に伝へ　三、ブース大将来りてその東洋に於ける使命を世に分つ予の主に対する責任や重且大なりと謂ふ可し……以下略……」と。さらに一九一一年四月一三日の日誌には「何事でも真似をしてはいけぬ　真似をすると必らず真似かぶる也　予は大分『バーナード』式を真似して真似かぶった『ジョジ・ミューラ』式を真似して真似かぶった『ブース式』真似して真似かぶっ

た」とし「独創的、天来式でなければ真正の発達は出来不申　糊付細工は早晩離れざるを得ず之れも永久的のものと思ふのが愚の骨頂なり」と認めている。

石井はブースから多くの物を学んだことは言うまでもない。しかし石井はあくまで自己にあった事業と思想を希求していた。救世軍来日から短期間ではあるが、救世軍と親和的関係にあった。しかし救世軍の中に身を置くことによってその実体を知り、石井はそれに委ねることが出来なかった。次第に「東洋救世軍」の再構築、「東洋十字軍」や「東洋伝道会」等の組織を創設したのである。かくしてブースでなく自己流に救世軍の事業を展開することの必要性をブース来日の時確信した。そして東洋救世軍への発想と大阪事業への思い入れが最終的には友愛社として結実していったのであろう。一方、石井は孤児院を故郷高鍋に移し、彼の地で地に足をつけて理想郷開墾事業に取り組んでいった。石井は二宮尊徳に惹かれ、労働の尊重、「鍬鎌主義」を唱道したり、晩年は「基督教」でなく「基徳教」と称した。また西郷の「敬天愛人」からの影響か、「天」という概念から「信天教」とも称した。石井には日本回帰とまでもいわないが、「真似」でない生来的な「本物」を常に希求していたように思われるのである。

註

（1）例えば石井とミュラーについて論じたものとして木原活信「石井十次にみるジョージ・ミュラー観の変遷過程」『キリスト教社会問題研究』第四五号（一九九六年）があり、徳富との関係を論じたものとして内田守「石井十次と徳富蘇峰」『九州社会福祉研究』創刊号（一九七六年）等がある。

（2）留岡とワインズについては拙稿「空知集治監時代の留岡幸助」『キリスト教社会福祉思想史の研究』（一九九四、不二出版）所収を参照されたい。

（3）従来、石井と救世軍について論じたものとして内田守「岡山孤児院に救世軍活動様式の導入について」『九州社会福祉研究』第二号（一九七七年）という論文がある。

（4）『石井十次伝』（一九三四、石井記念協会）四二八～四二九頁。

(5) たとえば日本の救世軍の通史を扱っている秋元巳太郎の『日本における救世軍の歴史』第一巻（一九六五、救世軍出版供給部）にも、植村正久のことは記述されているが、石井の東洋救世軍については何も触れられていない。

(6) 内田に依れば「明治初年の動乱から自由民権をへて二十年のナショナリズムに至る時代に、モラル・バックボーンを形成された者」となっており、その類型に石井は入るだろう。その年代を内田は「政治青年」と呼称している（内田義彦『日本資本主義の思想像』一〇五頁）。

(7) 一八八六（明治一九）年一二月、石井は荻原について次のように認めている。「荻原氏予に一書を与え予の脳病は全く精神を医学と宗教との二者に注ぎ有限の脳力を二方に引き分けしによると言ひ玉ひし言実に予が今日迄の歴史を約言したるものと謂ふ可き也」（『石井日誌』（86・12・14）、「予が明治十五年七月荻原氏に宮崎に於て別れ岡山に向ひし時氏予を戒めて曰く○君よ岡山に行くべし岡山はキリスト教も盛にしてまた医学校も良なり　君若し彼の地に至らば（一）六日の間は主一無適に妄りに朋友を求めず精神を医学に注ぎ勉強すべし（二）日曜日には会堂に行き説教等をきゝて精神を養うべし（三）金をかるべからず又たかすべからず」（『石井日誌』（86・12・19）と。

(8) 石井と新島襄との関係については、拙稿「一国の良心—新島襄、ラーネッド、ベリーそして石井十次」『キリスト教社会福祉思想史の研究』（一九九四、不二出版）所収を参照されたい。

(9) 当日の日誌には「本日吾れ洗礼を主の御恵に因りて受け始めて神の国民と為る事を得たり」と記している。（『石井十次日誌（明治十七年）』六五頁）。なお初期の石井についての研究は葛井義憲『闇を照らした人々』（一九九二、新教出版社）に収載された一連の石井十次に関する論文で詳しく論じられている。

(10) 杉井六郎『明治キリスト教の研究』（一九八四、同朋舎出版）三〇八頁。

(11) 金森が一八八六（明治一九）年一二月まで岡山教会を牧し、石井のみならず、炭谷小梅や留岡にも影響を与えたこと等に触れ、「もとより通倫の岡山における使命はキリスト教の伝道にあったことは勿論であるが、彼のキリスト教伝道活動を通じて当時封建社会から脱け出して間のなかった時代に文明開化の光がもたらされたことであり、或いは世界への開眼、社会に対する近代的感覚の高揚など彼の与えた影響は見逃すことはできない」（『岡山教会百年史』上巻、四〇頁）と評されている。

(12) 安部との関係は石井の日誌にしばしば登場する。例えば一八八七（明治二〇）年八月一六日の日誌には「青木要吉兄と共もに出阿予は独り岡山に向ふ途次阿倍磯雄兄を訪ひ日本孤児教育会のことに付相談し」云々とあり、岡山教会の牧師として事ある毎に相談している。また「孤児教育会設立概則」の中には、創業時代の賛助者に安部は入っており、「君は設立の当時

岡山教会牧師として同志社より赴任させられたりしが設立の当時には自ら四国に遊説して会員を募集し内に在りては或は説教を以て或は筆を以て岡山孤児院をキリスト教新聞紙上に紹介し過去十年間実に孤児院の友として大ひに尽力せられたり」（『石井十次日誌（明治二十年）』一三七頁）と記されている。

（13）安部磯雄は岡山教会牧師時代、特に石井との関係に於いて次のように述べている。「私は同志社以来一方には基督教によりて精神的希望を充たし、一方には慈善事業によりて物質的救済を行はねばならぬことを考へて居た。石井の孤児院が創立された時には私自らも目的の一部が達せられたかの如くに感じた。勿論私は教会の方が本職であり、孤児院は石井が専心一意経営に当つて居たのであるから、何も直接助力する必要はなかつた。然し慈善事業は私の最も重要なる目的であつたから、機会さへあれば、これを援助したのである。後年米国に留学した時にも私はニューヨーク市に於ける多くの慈善事業を観察したのである。私をして遂に社会主義者たらしむるに至つたのも、畢竟するに最初慈善事業に対して深き興味を有していたからだ」（『社会主義者となるまで』一四五～一四六頁）と。

（14）「将軍ブース氏の廃人利用策」『六合雑誌』第一二二号（一八九一年二月）。ちなみに植村は同時期、『福音週報』第四九号（一八九一年二月一三日）に「救世軍の大計画」を執筆し、その中で「予は英国に在留する間、襄くは救世軍に関する事実を探究し、その真相を知り得て、之を本国に帰るの家土産にせんと思い居たり」と述べているが、植村の当時の救世軍に対する思い入れが窺われる。

（15）この小雑誌には次のような連絡先が記されていたようである（『石井日誌』91・2・19）。

毎日午前及び夕	岡山市大道孤児院	石井　十次
毎週木曜日	岡山市七番町	阿倍　磯雄
毎日午前	岡山門田屋敷	守田幸吉郎
毎日		東山ベテー
毎日	岡山中山下	炭谷　小梅

（16）村山幸輝「救世軍の来日事情とライト大佐の日本救世軍」『山室軍平の研究』（一九九一、同朋舎出版）参照。

（17）島貫に関しては相沢源七『島貫兵太夫伝』（一九八六、教文館）参照。

（18）長坂に関しては本井康博「山室軍平の教会活動」『山室軍平の研究』（一九九一、同朋舎出版）参照。

（19）片山潜『英国今日之社会』（一八九七、警醒社書店）第三章第一「救世軍の社会事業」参照。ちなみに片山は「英国倫敦出

獄人保護会」『獄事叢書』第八号（一八九四年一一月）の中でも救世軍にふれている。

(20) 例えば一八九一年一〇月一八日には「東洋救世軍高梁進撃を決す」とあり、翌日には「五時四十八名の軍隊着市中を整列もて通行本営に着市内震動せり」とある。

(21) 博愛社については西村みはる『社会福祉実践思想史研究』（一九九四、ドメス出版）に詳しい。特に岡山孤児院との関係や小橋兄弟の動向は石井研究においても重要である。

(22) 一八九一年一一月一六日の日誌にも「あゝ主は予に何を命し玉ふや、内村氏の語に由るにジョンハワードは地震を利用して世に出でたりと」と記している。ちなみにジョンハワードは一七五五年のリスボン大地震の勃発の際、避難者救済に向かった。しかし勃発した七年戦争のため、フランスの捕虜となる。この時の体験が後の彼の活動の源泉となっているのである（川北稔・森本真美訳『一八世紀ヨーロッパ監獄事情』の「解説」参照）。

(23) 山本徳尚（一八七〇～一九三〇）は愛媛県松山の生まれで、小学校卒業し、海南英学塾を卒業後、同志社で学ぶ。一八九二年、普通学校卒業後、九五年神学部本科卒業。同年八月、網走分監の教誨師に就任。連袂辞職後、上毛共愛女学校で教師、そして三好退蔵らと感化事業に挺身し、東京養育院感化院書記となる。しかし明治末期からは実業界に転身していった（『人道』第二九九号参照）。ちなみに『人道』第三〇一号の山本徳尚追悼号（30・11・15）で山室は山本について次のように回顧している。「……前略……しかし乍ら山本君の訳読によつて、石井君が該書から学んだ所は多かつた。後に、石井君が岡山孤児院内に楽隊を造つたのも、又宮崎県の茶臼原には農業植民部を置き、大阪辺には市中植民部を置き、満鮮地方には海外植民部を置かうなどいふ計画を立てられたのは概ね前のブース大将の書から、暗示を受けたものにあらざるはない。私としては又、石井君と一緒に該書の聞いたのが、抑々救世軍に就いて何事かを学んだ発端にて、それより追々軍の運動、又主義等に注意を払ふやうになり、それから約三年を経て、明治二十八年の秋、軍の日本に渡来すると間もなく、それに身を投じて今日あるに至つたのであるから、考へ方によつては、山本君が『最暗国の英国及び其の出路』を、同志社病院の一室で訳読してくれたことが、私の一生及び日本の救世軍に与へた影響は決して少くないのである。さても不思議なるは、神の摂理の妙用である」と。

(24) 山室軍平『私の青年時代』（一九二九、救世軍出版及供給部）一二二～一二三頁。ちなみに山室は『女学雑誌』に「同志社病院に於ける石井十次君」第三二〇号（一八九二年六月一五日）という文を寄せている。

(25) 例えば一八九二年一〇月一日の日誌には「伝道の精神湧勃として起り帰岡の後は左の名詞を印刷せんと思へり、表―キリス

ト教伝教者、岡山孤児院主任石井十次、裏―私は岡山孤児院の主任にして又たキリスト教の伝教者でござります故に若し孤児院の話或はキリストの教を御聴くださるれば喜んで御話いたします予は帰岡後救世軍を組織して県下を巡回し伝道せん」と認められている。

(26) 『岡山孤児院月報』『岡山孤児院新報』については、拙稿「石井十次と『岡山孤児院新報』」『密教文化』第一七八号（一九九二年三月）を参照されたい。

(27) 救世軍の来日前後の状況については村山幸輝「救世軍の来日事情とライト大佐の日本救世軍」『山室軍平の研究』（一九九一、同朋舎出版）に詳しい。

(28) 一八九五年九月二二日の日誌には安部が「新信仰」を告白したことに対し、「あゝ予が岡山教会に対する使命は之れにて終れりと叫べり」と認めている。

(29) 石井と山室との交友については、拙稿「一国の良心―新島襄、ラーネッド、ベリーそして石井十次」『キリスト教社会福祉思想史』（一九九四、不二出版）所収を参照されたい。

(30) 一八九五年一二月一三日の日誌には「入軍を申込む」と記されているが、石井の救世軍入隊の如何の真偽については今後の課題である。

(31) これについての研究は村山幸輝「岡山における明治の救世軍」『山室軍平の研究』（一九九一、同朋舎出版）がある。

(32) 日記には以下のように認められている。「英国『ロンドン』ゼネラルブース氏に書面を呈す　即ち十月二十二日に認めし日本文の英訳なり　願くは予が一片の至誠この書に由って将軍『ブース』に達し東西相応して世界的救済事業の完成せらるるの日あらんことを　人は予が此挙を以て狂傲と言ふされど予に於ては実に真面目にかく感じかく確信せるなり　成否は天にあり感じたる儘を実行するは予の職責なり　ただ謹んで上天の応答を待つアーメン」（『石井日誌』96・12・7）。

(33) 音楽幻灯会の活動に関しては菊地義昭「岡山孤児院の音楽幻灯（活動写真）隊の活動と養護実践のかかわり」『共栄児童福祉研究』第四号（一九九七年）、同「東北三県凶作貧孤児収容後の岡山孤児院の音楽活動写真隊の活動内容」『東北社会福祉史研究』第一六号（一九九七年）等でその実体が詳しく論じられている。

(34) この件に関しては一色哲「メディアとしての音楽幻灯隊と岡山孤児院」『キリスト教社会問題研究』第四四号参照。

(35) 田中和男「石井十次を支えた人々――石田祐安と東洋伝道会――」『キリスト教社会問題研究』第四五号（一九九六年）参照。

(36) 秋元巳太郎『日本における救世軍七十年史』第二巻（一九六六、救世軍出版供給部）参照。

(37) ブースでの日本の活動については山室軍平『日本に於けるブース大将』(一九〇七、救世軍出版局)に詳しい。

(38) 山室著『日本に於けるブース大将』によれば、岡山の訪問を次のように書かれている。「それより俥を飛して、操山麓のベテー氏宅に入られ、暫く休憩したる後、其夜岡山基督教会に於ける、軍人及軍友大会に臨まるゝことゝなった。会堂前には緑門を設け、大将の大肖像を掲げ、装飾等も、仲々行届て居る如く見えたのである。岡山孤児院長石井十次氏は、此地方の軍友を代表し、大将が日本人民の、心霊上、大なる餓渇を覚えつゝある時代に、遙々来朝せられたることを喜び、謹んで其教を受けんことを望む旨を述べて、席に復さるゝと、大将は乃ち起って、馬太伝中の一句に原き、極めて凱切なる、警告を試みらるゝことゝなった。其主意は、人各々負へる所の職分あること、其職分を尽す心得等のことにて、例を引き、証を挙げ、満腔の誠意を傾注せられたので、集った程の者は皆、感奮興起。罪を悔ゆる者あり、献身の誓を新にする者あり、恩寵の座に進み出る者、実に百三十名に及んだのである。十六日(木曜日)午前九時、大将は岡山孤児院を訪ひ、其一千名の孤児に向ひ、彼等が逸早く思ひ立て、神に従ひ、善良、有用の人とならんことを勧告し。引続き、ベテー氏宅にて新聞記者と会見せらるゝことゝなった……以下略……」とある(『山室軍平著作集』第八巻、一三二頁)。

(39) 近代の大阪の都市スラムの問題に関しては、杉原薫・玉井金吾編『大正/大阪/スラム もう一つの日本近代史』(一九八六、新評社)等参照。

(補注) 『石井十次日誌』からの引用の場合、傍点、圏点、傍線等は削除した。

(本論文は一九九四年度同志社大学学術奨励研究費の交付による研究成果の一部である)